

令和7年度
研究紀要

秋田県立秋田北鷹高等学校

目 次

令和7年度秋田県教育委員会「いのちの教育あったかエリア事業」実績報告
研究主題：地域と歩む「自律・創造・共生」の実現～自己肯定感を育てる道德教育
教 頭 小林 正英・・・・・・・・・・2～8

先進校視察報告（埼玉県立大宮高等学校・埼玉県立大宮東高等学校）
教 諭 工藤 明
教 諭 石黒 翔之・・・・・・・・・・9～12

研究授業
・地歴公民科（公共） 授業者 教 諭 松井 公章・・・・・・・・・・13～15
・数学科（数学Ⅰ） 授業者 教 諭 石黒 翔之・・・・・・・・・・16～18

高等学校初任者研修
国語科 教 諭 加藤 凜・・・・・・・・・・19～23
農業科 教 諭 三浦 亘基・・・・・・・・・・24～26

研究主題:地域と歩む「自律・創造・共生」の育成～自己肯定感を育てる道德教育～

秋田県立秋田北鷹高等学校

報告者:教頭 小林 正英

1. 本校について

本校は、北秋田市にある県立高校であり、全校生徒は460名ほどである。北秋田市は県内で2番目に広い面積を有しており、その中で唯一の県立高校である本校は、地域の活性化や次世代の担い手育成において中心的な役割を期待されている。また、能代・大館・鹿角・上小阿仁・藤里地区など、広範囲から生徒が通学していることから、同様に少子高齢化の進む県北地域を支える人材育成が期待されている。普通科と農業科を併設し、校訓「自律・創造・共生」のもと、多様なコースを設置し、体験重視の学びとアグリビジネス教育を通して、新しい時代を切り拓く人材の育成を目指している。

2. 研究主題の設定理由

北秋田市では、人口減少と高齢化の進行により地域の担い手不足が深刻化しており、次代を担う若者が地域の一員として社会と関わり、地域を支える存在としての自覚を育むことが喫緊の課題となっている。このような状況の中で、生徒が地域社会との関わりを通して自らの役割や存在意義を実感し、自己の生き方を主体的に捉えていく学びの充実が求められている。一方で、高校生は他者との比較や失敗体験等を通して自己評価が揺らぎやすい時期であり、自己肯定感が十分に高まっていない生徒も一定数見られる。

こうした課題に対応するためには、地域貢献活動や地域と連携した学びを単発的な取組として位置付けるのではなく、教育活動全体を通して計画的・継続的に実施していく必要がある。そこで本校では、カリキュラム・マネジメントの視点に立ち、各教科や総合的な探究の時間、特別活動等を相互に関連付けながら、生徒が地域との関わりの中で自己理解を深め、自己肯定感を高めていく道德教育の在り方を検討す

ることとした。

また、本研究は、県教育委員会が推進する「いのちの教育あつたかエリア事業」の推進校としての取組の一環でもある。本県が道德教育の中核に据える「生命の尊さ」や「思いやり」を「いのちの教育」として位置付け、地域社会と連携しながら、生徒の豊かな人間性を育むことを目指している点は、本校の課題意識とも合致するものである。

以上を踏まえ、地域の人々との関わりを通じた実践を、学校全体の教育活動の中に体系的に位置付けることにより、校訓である「自律・創造・共生」を体現する力を育成するとともに、生徒が自己の成長を肯定的に捉えることのできる道德教育の在り方を探究することを、本研究の目的として研究主題を設定した。

3. 研究の仮説

- (1) 地域貢献活動や地域と連携した学びを、特定の活動にとどめることなく、各教科や総合的な探究の時間、特別活動等を通して計画的・継続的に位置付けることにより、生徒は地域社会の一員としての役割や責任を自覚し、校訓「自律・創造・共生」を具体的な行動として体現する道德的実践力を高めることができる。
- (2) 校訓「自律・創造・共生」を基にしたルーブリックを教育活動全体の共通基盤として作成し、生徒が自己評価や振り返りを行うことで、自らの成長や努力を客観的に捉えやすくなる。その結果、自己理解が深まるとともに、自己肯定感の向上が促され、学習への主体的な取組や地域への関心・参画意識の高まりにつながる。

4. 研究の検証方法

- (1) 7月および12月に、本校2年生とその保護者、

地域関係者として教育振興会員、学校評議委員、PTA 会員、教職員を対象として、県教育委員会が指定した「いのちの教育」に関する質問調査を Google Forms で実施する。これにより、生徒の自己肯定感や道徳的実践意識の変化、および地域との関わりに対する意識の高まりを検証する。

- (2) 1月には、本校2年生を対象に、地域貢献活動や日常の学校生活を通して得た学びや成長について、ルーブリック(別紙資料)を用いた自己評価と振り返り活動を紙面で行う。評価結果を分析し、生徒が「自律・創造・共生」の視点から自己の成長を肯定的に捉えられるようになったかを明らかにする。

5. 研究内容

(1) 研究の取組

本研究では、道徳教育を基盤に「いのちの教育あったかエリア事業」と連携しながら、生徒一人一人が自らの存在意義を実感し、自己肯定感を高めることを目指している。そのために、次の3つの柱を中心として教育活動を展開する。

① 学校教育全体を通じた「いのちの教育」の充実
特別活動などを中心に、学校教育全体でいのちの教育を推進する。すべての教育活動を「自律・創造・共生」の視点で再構築し、生徒が日常の学びや人間関係の中で命の尊さを実感できる教育を目指す。

② 「いのちの教育」体験・交流活動

生命の尊さや他者への思いやりへの理解を深めるため、地域の幼稚園・保育園、小・中学校、支援学校および地域の人々と、体験的・交流的な活動を行う。協働を通して、人とのつながりや支え合いの大切さを体感し、連携の輪を広げる。

③ 「いのちの教育」地域人材活用

地域に根ざした人材を教育活動に積極的に招き、地域の現状や取組、また講師の方の経験を生かした授業を展開する。地域の方々の語りや実践を通して、生徒が命・仕事・生き方について考える機会を広げ、地域とともに学ぶ機会を構築する。

(2) 取組の実践例

① 学校教育活動全体を通じて行ういのちの教育

| 月 | 取組 | 場面 |
|-----|---|------------------------------------|
| 6月 | 交通安全教室 (北秋田市警察署) | LHR (全校) |
| 7月 | 性教育講座 (大館市在住助産師) 薬物乱用防止教室 (北秋田市警察署) | LHR (1年生) LHR (全校) |
| 9月 | 自殺予防キャンペーン (北秋田市保健所) 普通救命講習 (北秋田市消防署) 防災講話 (北秋田市在住防災士) | 放課後 LHR (2年生) LHR (全校) |
| 10月 | SOS の出し方教室 (北秋田市保健所) | LHR (全校) |
| 12月 | 高校生の健康づくり教室 (北秋田市食生活改善推進協議会) | LHR (3年生) |

② いのちの体験・交流活動

| 月 | 取組 |
|-----|---|
| 6月 | 合川中学校に花育・鉢の供与 (生物資源科) |
| 7月 | 学校説明会 (参加者による体験実習等参加) |
| 9月 | 100キロチャレンジマラソン・ボランティア活動(有志生徒48名) |
| 10月 | 扇田こども園すもう交流体験(相撲部) 合川中学校の防災訓練参加(消防クラブ) |
| 11月 | 北秋田障がい児・者総合支援協議会 街歩き探検のサポート(家庭クラブ) 合川小学校に花育・鉢の供与 (生物資源科) |
| 12月 | 合川中学校に花育・鉢の供与 (生物資源科) 課題研究発表会・普通科(合川中3年生) |
| 1月 | 冬の笑学校 2026・「防災食でおやつを作ろう」(家庭クラブ) 課題研究発表会・農業科(合川中1, 2年生) |

(3) 研究校視察報告

本校では、高等学校における道德教育の在り方や、学校全体で道德教育を推進するための具体的方策について知見を深めることを目的に、先進的な実践を行っている埼玉県立大宮東高等学校を視察先として選定した。同校は、令和6年度から2年間、埼玉県道德教育研究推進モデル校に指定されており、12月に開催された研究発表会には、本校から2名の教員が参加した。

大宮東高等学校では、道德教育の推進に当たり、全教職員の共通理解のもと、教育活動全体を通じた計画・実施・評価・改善の循環を支える仕組みとして、目指す生徒像に基づいたルーブリックの作成・活用を行っている。道德の教科をもたない高等学校において、日常の教育活動全体を通して道德教育を実践していく上で、ルーブリックによる方向性の共有が有効に機能しており、その結果、教職員が共通の視点をもって指導に当たる体制が構築されている。この点は、本校が道德教育の在り方を検討する上で重要な視点を提供するものであり、取組を参考としている。

研究発表会では、日常の授業において、答えが一つではない道德的課題を、生徒一人一人が自分自身の問題として捉え、主体的に考え、議論する「考え、議論する道德」を実践している取組が紹介され、大変参考になった。高校生は、期待される価値観を理解していても、それを行動に結び付けることが難しい場面が見られるが、あらゆる教育活動の中で具体的な場面に即して意味や目的を考察させる取組により、規範意識の向上や道德的実践力の育成につながっている点は、本校の指導改善に生かすべき示唆に富むものであった。

さらに、同発表会で実施された研究授業では、日本とアフリカの生活・文化を比較し、自分の在り方生き方を見つめ直すことを主題とした授業が公開された。授業者は、教師海外研修で得たタンザニアでの体験を基に、教科書内容に実体験を重ねることで生徒の興味・関心を高めていた。写真資料を用いて生活の同質性・異質性を考えさせ、ダイヤモンドランキングを通して価値観を可視化・相対化することで、異文化への共感的理解を深めながら自己の生き方を再考させ

る工夫がなされていた。

本校においても、これらの取組を参考に、すべての教育活動を通して道德的実践力を高めるため、全校での共通理解を促進するルーブリックを作成した。校訓である「自律・創造・共生」を目指すべき三つの価値として整理し、独自のルーブリック(別紙資料)を作成するとともに、各教科や総合的な探究の時間等を通して、多様な立場の人々や社会の諸課題、価値観について考え、生徒一人一人が自分自身の問題として捉え、主体的に判断し、行動する道德的実践力を育むことの重要性を再確認した。

今回の視察を通して得られた知見は、本校における「いのちの教育」および道德教育の一層の充実に資するものであった。

6. 本事業成果の検証

(1) 質問調査

12月に実施した質問調査①では、複数の項目において肯定的回答の増加が見られた。特に、「家族を大切にしている」(+3.2ポイント)、「健康に気を付けて生活している」(+4.3ポイント)、「動植物を大切にしている」(+4.9ポイント)といった、生命や生活に関わる意識の向上が顕著であった。

これらの結果は、生徒の発達段階に伴う内面的成熟に加え、学校生活全体を通して積み重ねてきた学習活動、部活動、進路に関わる経験等が、自身や周囲の存在を見つめ直す契機となり、いのちや健康、身近な人への価値意識の深化につながったものと考えられる。

一方、「今住んでいる地域の行事に進んで参加しようとしている」は5.2ポイント低下しており、部活動や学習、進路選択等による生活の多忙化が、地域行事への参加意欲や実際の関与に影響を及ぼしている状況がうかがえる。また、「いのちのすばらしさにふれたり、感じたりした経験がある」についてもわずかな減少が見られ、経験の量よりも、その意味づけや振り返りの在り方が課題として示唆された。

・質問調査①(本校2年生生徒対象・共通項目)

| | 質問内容 | 7月 | 12月 |
|----|-------------------------------|------|------|
| 1 | 約束やきまりを守っている | 96.6 | 94.9 |
| 2 | 人が困っているときは、進んで親切にしている | 93.3 | 92.7 |
| 3 | 友だちと協力し、助け合っている | 96.0 | 96.4 |
| 4 | お世話になった人に、感謝の気持ちを伝えている | 94.6 | 95.6 |
| 5 | 家族を大切にしている | 94.6 | 97.8 |
| 6 | 好き嫌いなく食べたり、運動したりして、健康に気を付けている | 81.9 | 86.1 |
| 7 | 自分はまわりの人の役に立っていると思う | 60.4 | 61.3 |
| 8 | 今住んでいる地域の行事に進んで参加しようとしている | 48.3 | 43.1 |
| 9 | 動植物を大切にしている | 89.3 | 94.2 |
| 10 | いのちのすばらしさにふれたり、感じたりした経験がある | 84.6 | 83.2 |

(単位:%、回答数:7月 n=149、12月 n=137)

質問調査②の項目においては、「自分や友だちのいのちはかけがえのないものだと思う」「困難を克服し、生きることの喜びをみだしたいと思う」といった生命尊重や生き方に関わる項目で、7月から12月にかけて数値の向上が見られた。これは、友人関係の深化や他者理解を通して、生命の尊さを実感し、前向きに生きようとする意識が育まれていることを示すものである。一方、「自分の長所に気付いている」はやや低下したが、自己理解に伴う一時的な自己評価の揺らぎと捉えることができ、全体として価値意識の深化がうかがえる。

・質問調査②(本校2年生生徒・独自項目)

| | 質問内容 | 7月 | 12月 |
|----|--------------------------|------|------|
| 11 | 自分の長所に気付いている | 61.1 | 58.4 |
| 12 | 自分や友だちのいのちはかけがえのないものだと思う | 96.6 | 97.8 |
| 13 | 困難を克服し、生きることの喜びをみだしたいと思う | 87.2 | 89.8 |

(単位:%、回答数:7月 n=149、12月 n=137)

質問調査③では、すべての項目において肯定的回答が7月調査を上回った。特に、「いのちのすばらしさにふれたり、感じたりした経験がある」は12.4ポイント、「今住んでいる地域の行事に進んで参加しようとしている」は7.6ポイントの伸びを示した。

この結果は、地域との交流活動や協働的な取組を通して、生徒の姿が地域の大人の目に肯定的に映り、生徒の成長が可視化されていることを示している。本校の取組が、学校内にとどまらず、地域とのつながりを基盤とした学びとして一定の成果を上げていることがうかがえる。

・質問調査③(地域関係者・共通項目)

| | 質問内容 | 7月 | 12月 |
|----|-------------------------------|------|------|
| 1 | 約束やきまりを守っている | 87.1 | 91.0 |
| 2 | 人が困っているときは、進んで親切にしている | 92.3 | 96.3 |
| 3 | 友だちと協力し、助け合っている | 92.3 | 96.3 |
| 4 | お世話になった人に、感謝の気持ちを伝えている | 83.5 | 87.3 |
| 5 | 家族を大切にしている | 93.8 | 96.3 |
| 6 | 好き嫌いなく食べたり、運動したりして、健康に気を付けている | 71.1 | 82.1 |
| 7 | 進んで手伝いをしたり、人の役に立つことをしている | 67.0 | 73.1 |
| 8 | 今住んでいる地域の行事に進んで参加しようとしている | 45.4 | 53.0 |
| 9 | 動植物を大切にしている | 86.6 | 87.3 |
| 10 | いのちのすばらしさにふれたり、感じたりした経験がある | 74.2 | 86.6 |

(単位:%、回答数:7月 n=194、12月 n=134)

一方、質問調査④では、複数の項目において肯定的回答の割合が低下する傾向が見られた。特に、「家族を大切にしている」(-7.1ポイント)、「お世話になった人に感謝の気持ちを伝えている」(-4.2ポイント)といった家庭内での態度に関わる項目で顕著であった。

この背景として、生徒が心理的自立を進める時期にあり、保護者への依存が低下していること、部活動

や進路への意識の高まりによる心身の負担増などが影響していると考えられる。生徒が家庭内で感情や考えを表出しにくくなる一方で、保護者とその内面の変化を把握しにくくなっている状況が推察される。

実際、生徒自身の調査結果では、「家族を大切にしている」や「感謝の気持ちを伝えている」といった項目は上昇しており、保護者の認識との間に差が生じていることが明らかとなった。この認識差は、否定的な変化というよりも、成長過程における関係性の変容として捉える必要がある。

また、生徒・保護者の双方において「地域行事への参加」に関する項目が低下しており、生活の多忙化が家庭・地域との関係性にも影響を及ぼしている点は、今後の課題として共有すべき結果であった。

・質問調査④(本校2年生保護者・共通項目)

| | 質問内容 | 7月 | 12月 |
|----|-------------------------------|------|------|
| 1 | 約束やきまりを守っている | 84.3 | 86.2 |
| 2 | 人が困っているときは、進んで親切にしている | 91.6 | 89.7 |
| 3 | 友だちと協力し、助け合っている | 96.4 | 94.8 |
| 4 | お世話になった人に、感謝の気持ちを伝えている | 90.4 | 86.2 |
| 5 | 家族を大切にしている | 91.6 | 84.5 |
| 6 | 好き嫌いなく食べたり、運動したりして、健康に気を付けている | 69.9 | 69.0 |
| 7 | 進んで手伝いをしたり、人の役に立つことをしている | 62.7 | 67.2 |
| 8 | 今住んでいる地域の行事に進んで参加しようとしている | 45.8 | 41.4 |
| 9 | 動植物を大切にしている | 75.9 | 72.4 |
| 10 | いのちのすばらしさにふれたり、感じたりした経験がある | 69.9 | 67.2 |

(単位:%、回答数:7月 n=83、12月 n=58)

(2) ルーブリックによる自己評価

1月に実施したルーブリックによる自己評価では、2年生としての1年間の取組を、校訓「自律・創造・共生」に基づく3項目9価値について、A・B・Cの三段階で振り返るとともに、記述による自己評価を行った。

自己評価は、生徒自身がこれまでの学校生活を多面的に捉え、次年度に向けた課題や目標を明確にすることを目的として実施したものである。

分析の結果、項目「共生」における「思いやり」「協働性」「多様性」は、いずれもA・B評価に集中しており、生徒が対人関係や集団活動における自身の取組を肯定的に捉えていることが確認できた。記述内容からも、授業や探究的な学習、部活動、係・委員会活動、ボランティア活動、学校行事など、多様な場面において周囲と関わりながら役割を果たそうとする姿勢が育まれている様子がうかがえ、共生の価値が学校生活を通して着実に身に付いていることが読み取れる。

一方で、「自律」における「自己管理」や、「創造」における「発想力」「表現力」については、C評価の割合が10%を超える結果となった。「共生」が他者との関わりという行動経験を通して比較的実感しやすいのに対し、「自律」や「創造」は、学習や生活を振り返り、自身の内面を省察しながら評価することが求められるため、実感的に自己評価が難しくなり、個人差が生じやすいと考えられる。また、学習や生活を自ら調整・管理する力や、自分の考えや思いを言語化・表現する力について、生徒が十分な自信を持っていない状況を示している結果とも捉えられる。

さらに、記述による自己評価を分析すると、部活動や学校行事、校外活動における成果や努力については比較的具体的に表現できている一方で、日常の授業や学習過程における成長については、十分に言語化できていない生徒が多く見られた。このことから、学習場面における振り返りの機会や視点の提示、成長の過程を可視化する支援の在り方について、さらなる工夫が必要であると考えられる。

一方で、今回のルーブリックによる自己評価を通して、個々の生徒の内面の成長や課題が可視化され、生徒自身が自分の歩みを振り返る契機となったことは大きな成果である。特に、自己を肯定的に受け止め、新たな挑戦や成長につなげようとする前向きな記述が多く見られたことから、ルーブリックが自己肯定感を支え、次の成長へとつなげる有効な手立てであることが示されたといえる。

・ルーブリックによる自己評価

| 校訓 | 価値 | 評価 | | |
|----|-------|------|------|------|
| | | A | B | C |
| 自律 | 責任感 | 26.4 | 60.0 | 13.6 |
| | 自己管理 | 30.7 | 60.0 | 9.3 |
| | 自己決定 | 20.0 | 68.6 | 11.4 |
| 創造 | 発想力 | 32.9 | 63.6 | 3.6 |
| | 問題解決力 | 35.0 | 52.9 | 12.1 |
| | 表現力 | 55.0 | 44.3 | 0.7 |
| 共生 | 思いやり | 43.6 | 54.3 | 2.1 |
| | 協働性 | 40.7 | 56.4 | 2.9 |
| | 多様性 | 26.4 | 60.0 | 13.6 |

(単位:%、回答数:1月 n=140)

7. まとめ

本研究は、研究主題「地域と歩む『自律・創造・共生』の育成～自己肯定感を育てる道德教育～」のもと、高等学校における道德教育を全校体制で推進し、生徒の道德的実践力として定着させる在り方を探究してきた。

その中で、校訓「自律・創造・共生」を三つの柱として整理したルーブリックを作成し、学校全体の共通基盤として位置付けたことは大きな成果である。これにより、各教科や総合的な探究の時間、特別活動等を相互に関連付けながら、教職員が共通の視点をもって道德教育に取り組む体制を整えることができた。

質問調査およびルーブリックを用いた自己評価の結果からは、生徒が他者との関わりの中で自己を肯定的に捉え、「共生」を中心とした道德的価値を着実に身に付けるとともに、それらを日常の行動につなげようとする道德的実践力が高まりつつあることがうかがえた。特に、生命尊重や前向きに生きようとする意識の高まりは、自己肯定感を基盤とした価値意識の深化を示すものと考えられる。

一方で、発達段階に伴う自己評価の揺らぎや、学習・部活動・進路選択等による生活の多忙化に起因する地域参画の難しさといった課題も明らかとなった。しかし、こうした自己評価の揺らぎは、自己理解が深まる過程で生じるものであり、ルーブリックを活用した継続的な振り返りを通して、生徒が自己の成長や課

題を客観的に捉えようとする姿勢が育まれている点は、自己肯定感の基盤形成という観点から重要な成果である。

今後は、自己評価を定期的に行う機会を意図的に設定するとともに、日々の学習や学校生活における成果や取組を適切に言語化できる場面を一層充実させていく必要がある。また、家庭や地域との連携をより一層重視し、学校・家庭・地域が生徒の成長を多面的に支える関係性を構築することで、「いのちの教育」を基盤とした道德教育のさらなる定着と深化を図っていきたい。

本研究を通して、道德教育は、カリキュラム全体を見通した計画的・継続的な実践と、地域と連動した学びの積み重ねによって、生徒の道德的実践力と自己肯定感を相互に高める効果があることが示された。今後も、生徒一人一人が自己の価値を認識し、他者と共によりよく生きる力を育む教育の実現を目指していきたい。

Step-Up Path (振り返りシート)

クラス

No.

氏名:

| 校訓 | 価値 | 自己評価 | A (望ましい状態) | B (概ねできている状態) | C (課題がある状態) | A評価の内容 (取り組んだ内容) | 関連行事等 |
|----|--------|------|------------------------------------|----------------------------------|-----------------------------|---------------------|--|
| 自律 | 責任感 | | 自分の役割を理解し、主体的に責任を果たしている | 言われれば責任を果たせるが、自分から進んでやることは少ない | 責任を果たすことがうまくできないことがある | | <ul style="list-style-type: none"> 各教科の授業 総合的な探究の時間 実験や実習 部活動 係や委員会活動 清掃活動 学校祭・球技大会等の学校行事 休み時間の過ごし方やマナー インターンシップ 職場見学 ボランティア活動 地域行事参加 オープンキャンパス参加 資格試験・検定への挑戦 コンテスト・コンクール等への応募 自主学習や講習参加 課題提出 時間管理(無遅刻/提出期限) 健康管理 (睡眠・食生活等) 防犯・交通安全 SNS等での発信やマナー 後輩指導や友人サポート |
| | 自己管理 | | 規則正しい生活を保ち、何事も見通しをもって行動している | おおむね規則正しい生活を送り、見通しをもって行動しようとしている | 生活が不規則で、見通しをもって行動することに課題がある | | |
| | 自己決定 | | 状況を落ち着いて判断し、主体的に行動している | 主体的に行動することを心がけており、状況判断もおおむねできている | 感情や状況に流されやすく、主体的な行動に課題がある | | |
| 創造 | 発想力 | | 新しい視点や考えを積極的に提案し、生活や集団に生かしている | 提案はできるが、具体的な行動に欠ける | 新しい視点や考えを示すことに課題がある | | |
| | 問題解決力 | | 問題に気づき、原因を考えて適切な方法で解決に取り組んでいる | 問題に気づき、解決に向けて取り組もうとしている | 問題に気づくことや解決に取り組むことが十分でない | | |
| | 表現力 | | 自分の考えや気持ちを、相手や場面に応じて適切に伝えている | 自分の考えや気持ちを伝えようとしている | 自分の考えを伝えることに課題がある | | |
| 共生 | 思いやり | | 他者の立場や気持ちを理解し、配慮ある行動をしている | 思いやる気持ちはあるが行動に一貫性がない | 他者の立場や感情を考えることに課題がある | | |
| | 協働性 | | 集団(地域・クラス等)の一員として役割を果たし、協力して活動している | 協力できるが、受け身になりがちである | 協りに課題があり、個人行動が多い | | |
| | 多様性の尊重 | | 異なる考え方や立場を尊重し、誰とでも良好な関係を築いている | 異なる考え方や立場を尊重し、誰とでも良好な関係を築こうとしている | 考えや立場の違いを認めることに課題がある | | |

《自己評価後の感想(自分の良さや今後心がけたいことなど)》

埼玉県立大宮高等学校 先進校視察報告書

秋田県立秋田北鷹高等学校

教諭 工藤 明

教諭 石黒 翔之

1 視察日時

令和7年12月4日(木) 13時30分～15時00分

2 目的

- ・ 道德教育の先進事例調査
- ・ 進学指導体制および学習支援体制の先進事例調査

3 視察校概要

生徒数1,067人を有し、埼玉県では浦和高等学校、浦和第一女子高等学校と並ぶ県内トップの進学校である。近年、さいたま副都心駅が設置され、通学の便が良くなったおかげで埼玉県内の各地から生徒が集まるようになった。学級数は9クラスで、1年次から普通科8クラスと理数科1クラスに分かれている。1年生の1学期に文理選択。1コマ65分授業で毎日5コマ。土曜授業(午前中)も隔週で開講している。

I 教育目標

学問を重んじ、真理と正義を愛し、他人の人格を尊重するとともに、互いに協力して平和な民主国家及び社会の発展に寄与することができる、心身ともにすこやかな人間を育成する。

II 目指す学校像

勉強と部活動等の両立の実践と自主自律の精神の涵養により、高い志と強い使命感を持った未来を創るトップリーダーを育てる学校

III 重点目標

- 1 豊かな人間性と創造性を備え、主体的に課題解決に取り組む人材を育成する。
- 2 学力の向上を図り、生徒一人一人の進路希望を実現する。
- 3 校内の安心・安全の確保の徹底と積極的な情報公開により、県民の期待や信頼に応える。

4 視察内容

(1) 進路指導部主事との懇談

○ 道德教育について

日々の生徒指導による指導。その他、LGBTQを主題に人権講演会を毎年1回開催。今年度はアラブ文学を専門とする研究者であり、中東のパレスチナ問題に深く関わりながら難民を助けるさまざまな活動をしている早稲田大学文学学術院教授の岡真理氏を招聘し、講演会を開催した。

○ 進路指導について

① 進路目標

- ・ 学びのPDCAサイクルを自ら回すことを学ぶ。
- ・ 難関大学にチャレンジする
- ・ 全教科科目を大切に学習する

② 授業

- ・ 生徒同士の対話の重視
- ・ 日常の授業と探究活動の連携
- ・ 基礎基本の定着

③教員研修

- ・外部模試の問題研究・・・模試の電子データ化
- ・入試問題研究・・・難関大分析冊子の作成、東大入試の答案の分析
- ・校外研修・・・予備校授業力向上講習を自己負担なしで受講

④その他

- ・面談を各学年必ず5回以上実施。
- ・進路検討会は1年生1回、2年生1回、3年生は3回実施。
- ・定期的に進路説明会（駿台か河合塾）を実施し、難関大学を目指すきっかけを作り、モチベーションを維持させる。
- ・東大実践模試を活用し、東大勉強会を実施。仲間意識を持たせ引っ張り上げる。
- ・総合型選抜や学校推薦型選抜の指導は特に力を入れていない。

○当該校の課題

①進路選択の傾向

- ・文理選択で理系選択が増加。適性通りか疑問。
- ・理系は東大、科学大、地方帝国大を目指す。筑波大、千葉大、横浜国立大、農工大がその次のレベルとして人気。近年、若干弱気な傾向にある。
- ・文系は東大、一橋大が第1選択で、地方帝国大か早慶が次のレベル。
- ・医学科は20名程度の志望者。基本的に国公立が第1志望。

②問題点

- ・進学校としての草創期の教員がいなくなり、入れ替わっているため、質の維持に苦戦。
- ・保護者、生徒の志望、レベルは高いが、打たれ弱く安全志向。
- ・通塾率の増加
- ・社会の変化によるキャリア教育の難化

(2) 公開授業見学

①普通科1年4組 数学ⅠA 軌跡と領域(数学Ⅱ)

電子黒板を使用し、図形を見せながら授業を進めていた。プリントを使用した授業。分かる生徒はプリントを自分のペースで進め、分からない生徒は先生の授業を聞くスタイル。スマートフォンを自由に使用しており、自主学習に活用している。

②普通科理系2年4組 数学ⅡB 式と曲線(数学C)

極方程式の立て方、使い方を筋道立てて説明していた。授業の構成がしっかりと練られており、それぞれの課題解決が最後に一つにつながっていく授業であった。こちらの授業もスマートフォンを自由に使用しており、自主学習に活用していた。1年生に比べ、内容が高度ということもあって、参考書を開いている生徒が多数見受けられた。

5 まとめ

- ・道徳教育を全職員がすべての教育活動で意識すること。
- ・著名人を招いての道徳教育。
- ・職員が入れ替わっても、同じ指導が提供できるシステムの構築。
→校内外研修機会の拡充、進路検討会による知識の蓄積
- ・生徒をその気にさせる指導が必要。自分の学習は自分でコントロールさせる。
→定期的な面談、外部講師による良質な進路講演会

埼玉県立大宮東高等学校 先進校視察報告書

秋田県立秋田北鷹高等学校

教諭 工藤 明

教諭 石黒 翔之

1 視察日時

令和7年12月5日（金）9時20分～12時00分

2 目的

道德教育の先進事例調査

3 視察校概要

生徒数933名を有し、県内唯一の普通科（6クラス）と体育科（2クラス）を併設した高校である。体育的活動を通して心技体の充実に努め、挨拶や身だしなみ等の礼儀を重んずる生徒の姿は地域から高い評価を受けている。一方、コロナ禍の影響による実体験不足から、問題行動や学習意欲の低下などの課題もある。部活動が盛んで、安全・安心な環境で自主的・自律的な学校生活を送れることが特徴で、学習とスポーツの両立を目指す生徒に人気がある。

I 教育目標

人間尊重の精神を基盤とし、学問を重んじ、正義と真理を愛し、豊かな心情と心身ともに健康な人間を育成し、あわせて世界の平和と人類の福祉に貢献できる人物を育成する。

II 目指す生徒像

人間尊重の精神を持ち、学問を愛し、正義と真理を追求し、心身ともに健康で、世界平和や人類福祉に貢献できる豊かな人間性を持った生徒

III 令和7年度道德教育重点目標

- 1 規範意識を高め、他者を思いやる豊かな心を持った生徒の育成
- 2 勤労の尊さや社会への奉仕の気持ちを深め、進んで社会の発展に尽くす力の育成
- 3 目標を設定し、課題解決に向けて計画的・協働的にチャレンジを重ね、成長を踏まえ、行動改善に向けた省察ができる生徒の育成

4 視察内容

(1) 道德教育研究について

○研究主題

他者を思いやる豊かな心を持った生徒の育成

～全職員参画のもと、「考え、議論する道德」を目指して～

○仮説と研究内容

- 1 規範意識を高め道德的実践力を身に付けていくためには、ただ言われたことを守るだけでなく、具体的な場面に即してその意味・目的を考察するなどの「考え、議論する道德」が効果向上につながる
→「考え、実践する道德」指導法の研究と実践

「考え、議論する道德」

答えが一つでない道德的な課題を一人一人の児童生徒が自分自身の問題と捉え、向き合うこと

- 2 道徳教育において、全教職員の共通理解を図ることや、計画・実施・評価・改善に資するために、目指す生徒像をもとにしたルーブリック「心の筋力」を作成・活用していくことが有効
→ルーブリックの作成とそのルーブリックを計画・実施・評価・改善に資するための研究

「心の筋力」

当該校で設定した3つの力（思いやる力・「公共性」を大切にする力・チャレンジする力）の総称

○実践（ルーブリックの作成・活用・評価）

当該校で設定した3つの「筋力」を高めるために、身に付けてほしい資質・能力を各3つ（計9つ）を明らかにし、さらにその実現度を生徒18項目・教員9項目を3段階（A～C）で示した。そのルーブリックを活用した授業を展開し、普段の授業に道徳教育を取り入れた。最後に、「心の筋力」を生徒による自己評価・教員による生徒の評価を実施し、R6からR7の評価の変容を調査した。

○結果

低下した項目もあったが、生徒18項目中14項目・教員9項目中6項目で評価が向上した。

(2) 公開授業

○主題

日本とアフリカの生活・文化を比較し、自分の在り方生き方を見つめ直す

○授業について

今年度の教師海外研修タンザニアコースに参加し現地で得た知見を上手く生徒に還元していた。具体的には、教科書においてアフリカが事例としてあげられており、教科書内容としての見方だけでなく、授業者が自ら体験してきたことを扱うことで、生徒の興味関心を引き出していた。授業者は、今回の授業テーマである、生きがい・在り方生き方を考える際に日本と異なる生活や文化を考慮する必要を感じており、現在の日本に住む学習者として、一見異質に見えるアフリカの生活・文化に対して共感的理解を抱きながら、自らの在り方を捉えなおす仕掛けを設定していた。具体的には、アフリカの生活を写真で見せることによって日本と同質異質なものを考えさせ、ダイヤモンドランキングで個人の価値観をランク付けさせ、生徒の価値観を揺さぶっていた。

5 まとめ

- ・ルーブリック等の作成により道徳教育をすべての教育活動で意識すること。
- ・道徳教育を、社会科教員に頼るだけでなく、全職員で行う仕掛けをつくること。
- ・職員が入れ替わっても、同じ指導が提供できるシステムの構築。
→校内外研修機会の拡充による知識の蓄積・意識の植え付け

実施日時 令和7年10月28日（火）

場 所 2年B組教室

指 導 者 松井 公章

教 科 書 高等学校 公共（帝国書院）

1 単元名 「B 自立した主体としてよりよい社会の形成に参画する私たち」

2 単元目標

- (1) 現代の諸課題を捉え考察し、大項目「A公共の扉」で身につけた選択・判断の手掛かりとなる考え方や公共的な空間における基本的原理などを活用し、現実社会の諸課題について、必要な情報を適切かつ効果的に収集し、読み取る技能を身に付ける。
- (2) 現代社会の諸課題の解決に向けて、法、政治及び経済などの側面を関連させ、合意形成や社会参画を視野に入れながら、考察したり構想したりしたことを、論拠をもって表現する力を養う。
- (3) よりよい社会の実現に向けて、現代の諸課題を主体的に解決しようとする態度を養うとともに、多面的・多角的な視野を持ち、協働して解決することの大切さや国民主権を担う公民として、自国を愛し、自他の文化や宗教などを尊重する相互理解と寛容の態度を養う。

3 単元と生徒

(1) 生徒観

27名の普通科のクラスである。進学を希望する生徒が多い。授業に積極的に取り組む生徒が多く、意見交換も活発に行うことができる。生徒の公民科への興味・関心の程度は様々であり、また読解力など基礎学力に幅がある。そこで知識の有無にかかわらず解答できる課題に取り組み、視覚的に事象を整理する機会を取り入れている。

(2) 教材観

教科書、ワークシートを用いる。関連する項目について、インターネットを活用し、より深い理解につなげられるようにする。また、課題を生徒自身で決めて、レポートを書く課題に取り組みさせることで、生徒の授業外での学習を促し、現代社会への興味、関心を高めさせる。

本時では、ワークシートを用いて、具体的な事例について他者の考えを踏まえつつ、自分自身の考えをまとめることで学習目標の達成を図る。ワークシートは授業後回収し、生徒の記述内容から生徒の理解度を確認し、評価する。

- 4 単元計画
- (1) 租税の公平性 (1時間：本時)
 - (2) 財政の機能 (1時間)
 - (3) 日本の財政の課題 (1時間)
 - (4) 経済の変動 (1時間)
 - (5) 戦後の経済の変遷 (2時間)

5 本時の計画

(1) 評価規準

| A 知識・技能 | B 思考・判断・表現 | C 主体的に学習に取り組む態度 |
|--------------------------------------|--|--|
| ・諸資料から、必要となる情報を適切かつ効果的に調べまとめることができる。 | ・多面的・多角的に考察し公正に判断する力や、合意形成や社会参画を視野に入れながら構想したことを議論することができる。 | ・国民主権を担う公民として、よりよい社会の実現を視野に、現代の諸課題を主体的に解決しようとしている。 |

(2) 本時の目標：税制度の平等を保つことの難しさを理解し、どのような仕組みが公正であるかを自分なりに考え、他者と共有できる。

(3) 展開 [A：知識・技能 B：思考・判断・表現 C：主体的に学習に取り組む態度]

| | 学習活動 | 指導上の留意点 | 評価 |
|----------|--|--|-------------------------------------|
| 導入 10 | ○本時の目標を確認する。(一斉) | ICT 機器を用いながら提示する。 | |
| 展開 35 | 発問：日本の税の種類はなぜ 50 種類もあるのか。 | | |
| | ○租税公平主義について理解する。(一斉) ○様々なパターンについて公平を考える。(グループで最善方法を話し合う。)これまで学習したことをもとに考察し、発表する。(グループ→全体) | ICT 機器を用いて、簡単に説明する。 各グループ意見の公平さをクラスで共有するように補完・助言する。 話し合うパターンの条件を複雑化していく。 | どのような仕組みが公正であるかを自分なりに考え、他者と共有できたか。B |
| | 発問：税金の集め方や使い方を決めているのはなぜ国民なのか。 | | |
| | ○税を集め、使い道を決めるのは、なぜ国民であるのか考察する。 | 国民は税の使い道を決める責任があることを説明する。 | |
| まとめ 5 | ○本時の学習を踏まえて、ワークシートに公平さを保つための自らの考えをまとめる。(一斉) | ○これまで学習した思想家たちの思想について確認する。 | 公平についての自分の考えを持ったか。C |

研究授業 「主体的・対話的で深い学び」を意識した授業改善

〔グループ協議〕

(1)授業者からのコメント

- ・これまでの学習内容を踏まえて「税と公平」について授業構成を考えた。
- ・学んだことを日常生活の中に落とし込んで理解・考察させようと心掛けた。

(2)教師の工夫に関すること(指導方法、内容等)

良かった点

- ・ICTを活用した授業であった。
- ・クイズから導入に入って、生徒の興味・関心を引かせた。
- ・1時間の授業内にたくさんの問いがみられた。
- ・授業の最後に偉人の思想をもとにまとめさせていた。
- ・授業内で何を考えれば良いのか、生徒に対する提示の仕方が明確であった。
- ・生徒たちが自分で考える場面が多かった。問いの設定を変えて考えさせている。
- ・生徒の多様な意見を授業に反映させている。
- ・前時の内容を踏まえた学習内容となっている。

改善点

- ・1時間の内容としては多いような気がする。時間配分に工夫が必要だと感じた。
- ・導入で盛り上がりはいいような気がした。
- ・スライドで大事なところをより視覚的にわかりやすくすると良かった。
- ・グループ活動では、全員の意見が反映させていないように感じた。そのため、リーダー役をつくって意見を集める必要があると思った。グループ内で発言がしづらい性格の生徒もいるため、例えば付箋を用いて意見を文章でまとめる KJ 法を活用するなどの工夫が必要だと思った。

〔授業研修会〕

1班 ・導入が良かった。

- ・ICT活用の観点から、黒板と併用することを前提とした PowerPoint の構成となっており、大変参考になった。
- ・生徒にとって、楽しく、安心して発言できるような工夫が随所に見られた。
- ・主権者教育として活用できる授業であったと思った。

2班 ・生徒の興味を引く問いと、学習のステップを踏む問いが使い分けられていた。

- ・一度具体的に考えたあと、考えを抽象化・概念化する段階まで授業で実施されていた。
- ・生徒の考えを文章化させることは、生徒の考えを明確に把握する上でも良かった。
- ・問いが生徒から発せられる場面があるとより良いと思った。
- ・生徒の意見が、生徒自身の主観性になりがちなような気がした。

3班 ・税から哲学思想まで幅の広い学習内容であり、大変参考になった。

- ・幅広い分野を扱っている内容であったため、何をメインにしているのかが分からなかった。

〔全体会 指導主事より〕

高校教育課指導チーム 岩谷 宣行 指導主事

生徒に一度調べさせてから発表・発言させていたため、発表・発言がしやすい雰囲気づくりが意識されていたと感じた。他者との意見の共有も行われており、また、自分が税をかけられたときにどうすべきかを考える場面もあり、生徒の思考が深まる授業であった。

改善点として、1点目に意見の違いを確認する時間が必要だと感じた。また2点目に本授業では教員の予想の範囲内であったように思った。さらに3点目に授業内容の評価がより分かるようにしてほしい。

第1学年 数学科(数学I) 学習指導案

実施日時 令和7年10月28日(火)

場 所 1年A組教室

指 導 者 石黒 翔之

教 科 書 新編数学I (数研出版)

1 単元名 第3章 2次関数

2 単元目標

- (1) 2次関数についての基本的な概念や原理・法則を体系的に理解するとともに、2次関数を用いて事象を数学化したり、数学的に解釈したり、数学的に表現・処理したりする技能を身に付ける。
- (2) 2次関数を活用して事象を論理的に考察する力、事象の本質や他の事象との関係を認識し統合的・発展的に考察する力、2次関数の表現を用いて事象を簡潔・明瞭・的確に表現する力を身に付ける。
- (3) 2次関数について、数学のよさを認識し積極的に数学を活用しようとする態度、粘り強く考え数学的論拠に基づいて判断しようとする態度、問題解決の過程を振り返って評価・改善しようとする態度を身に付ける。

3 単元と生徒

(1) 生徒観

男子7名、女子9名、計16名の特別進学クラスである。全体的に授業に向かう姿勢は前向きで、積極的に発言をする生徒も見られるが、数学に苦手意識をもっている生徒も多い。そこで本単元では、式からグラフ・グラフから式と自由自在に方程式を扱えるように生徒に興味・関心をもたせ、数学的に思考することの良さを感じ取ることができるように指導したい。

(2) 教材観

2次方程式の解が2次関数のグラフと x 軸との交点の x 座標で捉えられることを理解できるようにする。さらに、2次不等式の解の意味を理解し、2次関数のグラフと x 軸との位置関係から2次不等式の解を求めることができるようにするとともに、グラフを活用することのよさを認識できるようにする。

4 単元計画

- (1) 2次方程式 (2時間)
- (2) 2次関数のグラフと x 軸の位置関係 (3時間)
- (3) 2次不等式 (7時間：本時6時間目)

5 単元の評価規準

| A 知識・技能 | B 思考・判断・表現 | C 主体的に学習に取り組む態度 |
|---|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・2次関数の値の変化やグラフの特徴について理解している。 ・2次関数の最大値や最小値を求めることができる。 ・2次方程式の解と2次関数のグラフとの関係について理解している。 ・2次不等式の解と2次関数のグラフとの関係について理解し、2次関数のグラフを用いて2次不等式の解を求めることができる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・2次関数の式とグラフとの関係について、コンピュータなどの情報機器を用いてグラフをかくなどして多面的に考察することができる。 ・2つの数量の関係に着目し、日常の事象や社会の事象などを数学的に捉え、問題を解決したり、解決の過程を振り返って事象の数学的な特徴や他の事象との関係を考察したりすることができる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・事象を2次関数の考えを用いて考察するよさを認識し、問題解決にそれらを活用しようとしたり、粘り強く考え数学的論拠に基づき判断しようとしたりしている。 ・問題解決の過程を振り返って考察を深めたり、評価・改善したりしようとしている。 |

6 本時の学習

(1) 本時の目標：2次関数のグラフとx軸の正の部分が異なる2点で交わる条件を考察することができる。

(2) 展開 [A：知識・技能 B：思考・判断・表現 C：主体的に学習に取り組む態度]

| | 学習内容 | 指導上の留意点 | 評価 |
|--------------|--|--|--|
| 導入 5 | <ul style="list-style-type: none"> ・本時の目標を確認する。 | | |
| 展 開 35 | <ul style="list-style-type: none"> ・Geogebra で適当に設定した2次関数を4つ(正2つ・負2つ・正負1つずつ・その他)に分類する。【2人1組】 | <ul style="list-style-type: none"> ・$a > 0$で考えさせる。 ・生徒から挙がらない分類については補充する。 | |
| | <p>発問：2次関数のグラフとx軸の正の部分が異なる2点で交わる関数の共通点は何だろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・正の部分が2つ交わる関数から共通点を見いだす。【4人1組】 ・他の分類の式を調べることで、正の部分が2つ交わる条件を明確にする。 ・3条件(頂点のy座標・軸・y切片)のすべて条件がそろわないといけないことを確認する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・2次関数のcの値($c > 0$)から始めさせる。 ・生徒が気づかないときは2次関数の軸・頂点を確認させる。 ・プロジェクタでグラフを動かしながら確認させる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・2次関数のグラフとx軸の正の部分が異なる2点で交わる条件を考察することができる。[B] |
| まとめ 10 | <ul style="list-style-type: none"> ・クラスルームに出した課題により、3条件をまとめ、自己評価をし、提出する。 ・次時の内容を確認する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・自分の表現でまとめさせる。 | |

グループ協議

【グループ活動】

- ・ マグネットやアプリ、ホワイトボードの活用が有効であった。
- ・ グループ活動で深い学びの実現が見られた。
- ・ 2ペア活動と4人グループの活動の使い分けが良かった。
- ・ グループ内では、明確な役割分担が行われていた。

【教師の支援】

- ・ 思考を深める上でのヒントが有効だった。
- ・ 教師と生徒のやりとりが上手に行われていた。
- ・ ICTを効果的に活用しており、生徒が主知的に活動するきっかけとなっていた。
- ・ 日頃からの指導により、生徒の動きが素晴らしい。
- ・ 机間指導において、生徒の様子をよく把握している。

●改善点

- ・ グループ活動でわかっている人が埋没しているため、どのように活躍させるかがポイント。
- ・ 4人全員がアイデアを出せる仕組みが必要。
- ・ 導入の場面で前回の復習の場面を設けることも有効。
- ・ 班で進捗状況が違う場合の支援が必要。
- ・ 生徒がアプリを使う場面をもう少し使うべき。
- ・ グラフを投影した画面が見づらい。

指導助言

生徒の発言で重要な箇所が多数見受けられた。また、ICTやホワイトボードなどの重要なツールをたくさん活用していた。どうやれば深い学びにつながるのかを考え、今まで勉強してきたことがつながるように指導することも大切。生徒からの問いを大切にして授業を行ってほしい。

既習内容との関連について、下に凸の2次関数を色々なポジションの時を考えさせることで学びを深められた。感覚的に予想し、ICTを用いて確認し、自分の中で疑問を持たせることができていた。問いに関しては、グループ外の人との意見を共有することやグループ活動中に生徒のヒントとなる言葉を拾うことも大切。生徒の発表において、不完全な状態から、しっかり考えさせ、まとめることができていた。また、教室全体で生徒が「わかった」と思えるように生徒と授業を作り上げていた。グラフ関数ソフトについては、値を入力する前に、どのようなグラフになるのかを予想してから、グラフ関数ソフトを用いて確かめるという活動も取り入れたら尚良い。

第1学年 国語科（現代の国語） 学習指導案

授業者 加藤 凜

日 時 令和7年10月9日（木）4校時

場 所 1年C組教室

教科書 現代の国語（第一学習社）

1 単元名

作品設定や表現がもたらす効果を分析しながら文学作品を読む。（「夢十夜 第一夜」）

2 単元設定の理由

本単元は、文学作品ならではの世界観に対して、自分自身の解釈と他者の解釈とを交差させながら読み解く力を身に付けることをねらいとしている。本単元で扱う「夢十夜」は夏目漱石の短編であり、十篇の小説を編んだアンソロジーである。今回は、「夢十夜」の中でも幻想的かつ抽象的である「第一夜」に焦点を当てるため、他の小説よりも読む際の視点を顕在化しなければ読む力を育成する指導に繋がりにくいといえる。よって、教材研究として作品の文章構成や表現分析をより一層丁寧に行うことが求められる。

本作品独特の手法である「夢の語り」は、物語の非現実的な設定や展開を包み込む装置として、効果的に用いられている。一見不気味な「女」に関する描写や、「夢らしさ」が溢れる表現の描写に関して検討することで、今後文学作品を読む際にも必要となる読む力を身に付けられるよう、本単元を設定した。

3 生徒の実態

男子17名、女子16名のクラスである。本クラスの生徒は、国語の学習に前向きで、積極的に授業に取り組む姿が見られる。文学的文章として既習事項である「羅生門」では、文章構成を捉えた上で、不気味さを演出させるための表現の描写や登場人物である「下人」と「老婆」の人物像について考える学習活動を実施した。登場人物の言動から、心情の変化を分析する力が徐々に身に付けられていると感じる。また、単元ごとに実施している振り返りシートにも学んだことを今後の学習や日常生活に生かそうとする記述が見られ、意欲的に学習に取り組む姿勢が見られる。一方で、自分自身の解釈を表現することが苦手であり、グループ協議の際にもなかなか発言できない生徒が多く見られる。

4 単元の目標

- (1) 比喩、例示、言い換えなどの修辞や、直接的な述べ方や婉曲的な述べ方について理解し使うことができる。
[知識及び技能] (1) カ
- (2) 文学作品の内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉え、要旨や要点を把握することができる。
[思考力・判断力・表現力等] C (1) ア
- (3) 言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。
[学びに向かう力・人間性等]

5 単元の評価規準

| 知識・技能 | 思考・判断・表現 | 主体的に学習に取り組む態度 |
|--|--|--|
| ①比喩、例示、言い換えなどの修辞や、直接的な述べ方や婉曲的な述べ方について理解し使うことができている。((1) カ) | ①「読むこと」において、文学作品の内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉え、要旨や要点を把握している。(C (1) ア) | ①言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養おうとしている。 |

6 指導と評価の計画（計5時間）

| 時 | 主たる学習活動 | 評価する内容 | 評価方法 |
|---|---|-------------------|--------------------|
| 1 | 「夢」に関する情報を共有した上で本文を通読し、初読の感想と疑問を書きまとめる。 | [知識・技能] ① | 「記述の分析」 |
| 2 | 前時で挙げられた疑問を全体で共有し、グループで検討する。 | [思考・判断・表現] ① | 「行動の観察」 「記述の分析」 |
| 3 | 内容に関する疑問をさらに深掘りし、全体で共有する。 (本時) | [思考・判断・表現] ① | 「行動の観察」 「記述の分析」 |
| 4 | 本作品のクライマックスについて、作品の構造と結びつけながら検討する。 | [思考・判断・表現] ① | 「行動の観察」 「記述の分析」 |
| 5 | 振り返りの記述を確認し、単元全体の学習を振り返る。 | [主体的に学習に取り組む態度] ① | 「記述の分析」 |

7 本時の計画（2/5時間）

(1) 本時の目標（ねらい）

疑問点を共有し、描写と表現の特色について読みを深める。

(2) 学習活動と評価

| 段階 | 学習活動 | 指導上の留意点 | 評価場面・評価方法 |
|------------|--|--|--|
| 導入 10分 | <ul style="list-style-type: none"> ○前時までの学習を確認する。 (一斉) ○本時の学習活動を確認する。 (一斉) | <ul style="list-style-type: none"> ・前時までの学習内容や構成・展開を想起できるように、ノートや ICT 機器を用いながら確認する時間を設ける。 | |
| 展開 30分 | <ul style="list-style-type: none"> ○初読の感想を共有する。 (一斉) | <ul style="list-style-type: none"> ・生徒が問いをもって授業に参加できるように、生徒自身の言葉で目標を設定する。 | |
| | <p>発問：表現の特色がもたらす効果や、隠されている意図はなんだろうか。</p> | | |
| | <ul style="list-style-type: none"> ○全体で疑問を共有した後、グループごとに振り分けられた疑問について考える。 (個→グループ) ○他のグループと情報を共有し、自分のグループに情報を持ち帰る。 (グループ) ○それぞれの疑問についての考察を、全体で共有する。 (一斉) | <ul style="list-style-type: none"> ・既習事項を生かして考えることができるように、「羅生門」の単元において、人物の行動や人物像に着目してきたことを確認する時間を設ける。 ・他の視点からも考えることができるように、他の疑問について検討しているグループと意見交流を行う時間を設ける。 ・他のグループが発表している際に、自分の担当以外の疑問に対しても理解を深められるように、ワークシートにメモするよう促す。 | <p>[思考・判断・表現] (机間指導・生徒の発言・ワークシートの記述)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他者と協働しながら、表現の効果や意図を読み解こうとしている。 |
| まとめ 10分 | <ul style="list-style-type: none"> ○本時の振り返りを行い、次時の学びに繋げる。 (個→一斉) | <ul style="list-style-type: none"> ・文学作品を読む際の汎用的な視点を獲得することができるよう、本時の学習過程を振り返るよう助言する。 ・次時の活動を想定できるように、今回の疑問と考察をもとに、さらに内容の検討を進めていく旨を伝える。 | |

本時の目標

| |
|--|
| |
|--|

◎グループで「夢十夜 第一夜」を音読しよう。 ※男、女の感情を想定しながら！

☆自分のグループ（ 班）で考える疑問

| |
|--|
| |
|--|

| 自分の考え | グループで話し合っ出てきた意見・根拠 | 他の班の考えで繋がりそうなこと |
|-------|--------------------|-----------------|
| | | |

☆疑問に対するグループの結論 ↓ホワイトボードに簡単にまとめる。 ↓発表する代表一名決める。

| |
|--|
| |
|--|

☆他の班の発表から、四つの疑問についての謎を説明しよう。

疑問① 「黒」「赤」「白」など、色彩表現に隠された意図は？

疑問② 「星の破片」「大きな真珠貝」が出てくることによる効果は？

疑問③ 「真っ白な百合」は何を指すのか？

疑問④ 最後に出てくる「冷たい露」「暁の星」とは何か？

振り返り(独特な描写や表現について、疑問を解決することができたか？新たに生まれた疑問、謎などあれば教えてね)

【参観者の意見】

参観者：小林正英教頭先生 須藤規子先生 鈴木恵美先生 幸坂恭寛先生 青山竜也先生

授業後、参観していただいた先生方と協議を行った。挙げられた意見は以下の通りである。

<協議の視点>

主体的・対話的で深い学びが実現されていたか。(ヒントの出し方・意見の集約の仕方)

成果

- ・生徒たちが自ら動くことができるような工夫がされていた。
- ・授業の準備が十分にされていた。(ワークシートや教材研究など)

課題

- ・ヒントカードを与えていたことによって、疑問に対する答えでは無く、ヒントの答えを探すグループが多く見受けられた。考えの視野が狭まってしまったのではないか。
- ・生徒が発表しているとき、その生徒の方を見ずに板書をしてしまっていた。発表が不安な生徒もいるため、しっかりと反応するべきだ。
- ・今回はホワイトボードを用いて情報共有を行っていたが、文字が小さい・時間がかかるなどのデメリットがあった。ICTを用いて効率化を図ることができないか、検討する余地がある。

改善策

同じ疑問の班に対して、異なるヒントを提示し、その後ジグソー法を用いて意見交換をするのはどうかという改善策を提案していただいた。そして、最終的には同じ疑問同士で大きな1つの班を構成することで、発表時間を短縮できる上に、さらに洗練されたまとめになるのではないか。

秋田県立北鷹高等学校 生物資源科

実施日：令和7年10月9日（木）2校時

場所：1年N組 教室

対象生徒：1年N組 25名

授業者：三浦 亘基

教科書：作物（実教出版）

1 単元名

第3章 イネ 第1節 栽培的特性

2 単元の学習目標

- (1) 世界と日本のイネの種類や形態・生理・生態的特徴、栽培の現状を理解し、活用できる。
- (2) イネの栽培計画を立て、生育段階に応じた栽培管理ができる。
- (3) イネの栽培管理の座学および圃場での活動について自ら学び、主体的かつ協働的に取りくもうとしている。

3 生徒観

1年N組には稲作農家を営んでいる生徒は1人のみだが、普段自身が食べる米に興味を持つ生徒が多く、積極的な発言や意見交流をする姿が見られる。田植え（手植え）実習や稲刈り実習を通して、自身が植えたイネの姿に興味を持ち、観察や管理作業も積極的に行い、学ぼうとする姿が見られ、授業への期待値も高く感じる。

4 単元観

今回の単元では、イネの一生の中でその形態・生理・生態的特徴を理解し、生育段階ごとの管理方法を理解することが必要である。毎日食べる米がどのように作られているのかについて、実物の観察や実際の管理作業を通して学ぶ場を設けて、その中で課題発見やプロジェクト学習につながるような活動にしたい。

5 指導観

本校の「教育目標（北鷹プロジェクト）」と生物資源科の「学科目標」に則り、地域社会と郷土の発展に貢献できる人材の中でも「即戦力」として活躍できる人材育成を目指す。そこで教室での座学に限らず、圃場に出て実物を扱った指導を主として行う。

6 単元の指導と評価計画

(1) 単元の指導計画（計8時間）

| 時間 | 主な指導内容 | 知 | 思 | 主 |
|----|--------------------------|---|---|---|
| 1 | 栽培の現状と特性 「世界と日本のイネを学ぶ」 | ○ | | ○ |
| 2 | 生育のすがた 「イネの一生 種もみと発芽」 | ○ | | |
| 3 | 生育のすがた 「イネの一生 茎と分けつ」 | | ○ | |
| 4 | 生育のすがた 「イネの一生 穂と収穫」 | | ○ | |
| 5 | 生育のすがた 「イネの収量構成要素」 本時の授業 | ○ | | |
| 6 | 生育と環境要因 「イネの生育に関わる気象条件」 | ○ | | ○ |
| 7 | 生育と環境要因 「イネの生育に関わる土壌条件」 | ○ | | ○ |
| 8 | 品種と特性の選び方 「日本の水稲品種と品種特性」 | | ○ | ○ |

(2) 単元の評価規準

| 知識・技術 | 思考・判断・表現 | 主体的に学習に取り組む態度 |
|---|---|--|
| イネの一生の中でその形態・生理・生態的特徴と生育段階ごとの管理方法を理解している。 | イネの栽培における課題の発見や障害の予防策について、科学的な根拠に基づいて創造的に解決できる。 | イネの栽培管理の座学および圃場での活動について自ら学び、主体的かつ協働的に取り組もうとしている。 |

5 本時の計画

- (1) 題材名 イネの収量構成要素
 (2) 本時の目標 イネの収量を構成する5つの要素を学び、実際の収量を予測できる。
 (3) 本時のねらい イネや水田の様子からおおよその収量を予測できるようになる。
 (4) 学習過程

| 過程 | 学習活動 | 指示・説明および指導上の留意点 | 評価方法 |
|---|--|---|--------------------------|
| 導入 (5) | 1 イネの播種～収穫までの流れを確認する。 2 本時の目標を確認。 | ・生育段階ごとの管理で、なぜその管理を行うのか、管理が適当でなければどうなるのかを問う。 | |
| 【本時の目標】 イネの収量を構成する5つの要素を学び、実際の収量を予測できる。 | | | |
| 展開 (35) | 3 収量構成要素について (1) 個人で収量を予測する要素について考える。 (2) グループで意見を共有する。 4 各グループから出た意見をもとに収量構成要素について学ぶ。 5 実際のイネを用いて各グループで1要素ずつ測定し、実際に収量を予測する。 | ・実際のイネと水田の写真を提示する。 ・グループからの意見はホワイトボードにまとめるよう促す。 ・多くのグループに共通する内容から取り上げ解説していく。また出なかった要素について重点的に解説する。 ・測定に必要なものをグループに配り、それぞれ何を測定すべきかを考えさせながら活動を進める。 | |
| まとめ (10) | 6 収量構成要素と計算の注意点について解説を受けながらまとめる。 | ・最終的な収穫物の形態（玄米、袋など）に変換して求められるよう指示する。 | 〈知・技〉 ワークシート まとめ問題 |

《協議の視点》 知識習得のための教材の提示は適切であったか

成果

- ・本時の目標が明確であり、授業の流れもスムーズに進行した。
- ・生徒の小さな反応も拾うことができ、発言を恐れない雰囲気作りができていた。
- ・グループ活動の指示の中で、注文やヒントを与えずに、生徒自らが考えて活動する姿が見られた。
- ・実際のイネに限らず、スライドやホワイトボードなど「見てわかる教材」を活用し、生徒の興味を引きながら授業を進めていた。

課題

- ・グループワークの前に個人で考える時間をとることで活動がより活発になる。
- ・スライドとプリントの構成が異なる部分があり、一部困惑する生徒も見られた。
- ・班編制によって基礎学力に差があり、課題解決能力に差が出た。
- ・「収量構成要素」のイメージができていない生徒に対するアプローチが必要であった。
- ・今回の内容は演習であり、実際の水田や農家の実情を含めた説明を加えるべきであった。

改善策

今回のように演習を絡めた授業を行う場合、個人で考える時間の確保や、より活発な活動にするために、1時間で授業を構成するのではなく、その前後も使い2～3時間での授業を計画するべきである。特に今回はある程度教師側から指示や説明があったうえでの活動であったため、例えば次回は復習も兼ねて全行程を生徒自らにやらせることで、より理解が深まる授業になると感じた。

授業の反省

授業を終えて協議する中で感じたことは、教師側の頭の中と生徒側の頭の中を一緒にしてはいけないということだ。特に今回のように収量を求める演習を伴う授業では、求められた結果に対して「あくまで演習」ということを生徒に説明しないと、生徒はこの結果が実際の結果であると思ってしまう可能性があると感じた。実際の現場の実情がわからなければ異常にも気づけないし、それに気づくことができるよう授業で指導しなければいけないが、今回の授業ではその説明を怠ってしまった。現場が一番学びの場になると考えているが、その現場に入る前に正確な知識を生徒が身につけられるよう、発する言葉一つ一つに注意し今後の授業を計画していきたい。